

庭瀬湯人移紳。野崎幼庵。〇名藤傳行

〇本庄信翁。〇山月白華。〇岡崎(生)。〇岡西里林と岡西里山。〇山七階人物篇。第ニ子

# きざりごと

NO.5 月刊

昭和三十四年九月一日 発行  
発行所 岡山県都窪郡吉備町庭瀬七〇七 宇垣方  
吉備観光協会

## 〇 野崎幼庵翁 (その二)

三、 寺院蓮誡日諱信士 八十三歳  
明治三〇歳六月晦日 野崎助三郎敬尊等  
(右大の祖父)

## 運池院妙衆信女

弘化庚申年三月十五日 吉備足守領三子邑  
園 右三門 嫡女

## 三、 善信院妙悦信女

(五町) 余老考良藏信明正事備前岡山瓦街富田屋  
清之と女通稱磯口余母也余生三歳母有故  
而去我家再婚為紙屋街淡田屋幸八と妻  
天政九年丙戌年七月十四日病卒供岡山伊  
住山蓮日寺内幸生院之墓葬并于此皇福  
已數十年富田典滿田口菅口口改余行而  
母之墳墓使僧祭之亦口口余也口口口  
(口信所不明) 野崎敬尊達

善信院は敬尊の生母にして、父英  
通の先妻である。天明八年敬尊が  
三歳の時に故あつて野崎家を去り  
淡田屋へ再婚したが、敬尊が四才

昭和十七年二月十六日 張応六の妻  
津彌 五十四才

## 〇 草野蓋江翁

名は長三郎、蓋江はその号である。父を竹次郎といひ、明治二年六月吉備  
町手野三六一番地の屋敷に生れた。(是處は庭瀬駅前十字路東の南角である)。一人の姉  
あり名きヒデという。岡山市小原町の山田某に嫁ぐ。草野家は此の經志  
は三河國にレる志深年間板倉氏が庭瀬に移封の時此地にお着した家筋で  
ある。代々屋号を三河屋と稱へ始めは商人であつたが後々農業に轉じたよ  
うである。

蓋江は幼少の頃から生れつき日辛勇に趣味をもち、鋤鋤の業を好まず將  
來運家によつて身をたてんと志した。偶々町に閑といふ宿屋があつてこの  
宿へ小西皆雲といふ旅の運家公滞在して運道を教授してゐたので、これに  
師事して手ほどきを受けた。後々御里を去つて岡山に出で、数年ならぬし  
て上京し蓋江の運道に精通した。その師匠が誰かであつたかといふことは詳  
でない。中央運壇に名を知られたいふ野橋村、山口草平、菅橋考等はい  
づれも蓋江の密友である。

翁は独得の取風をもち、斯界にかなりその名をたし御里よりも京坂地方に  
その技を賞せられたいふようである。殊に古運の鑑定に造詣が深く、東西  
よりその教を乞ふものが少なからず。晩年は右御に帰り宮内のお家岡野氏  
の知遇を受け、その家に寄食した。運筆を振つた。手素即ちの先輩大養  
本堂翁を慕つてゐたので吉備津神社境内にある本堂翁の銅像の傍に草庵を  
結んで住み、條々運道に親み余生を送り昭和二十八年四月八日、八十五歳の  
高齡で長逝した。死体は茶毘にすし正善院先堂の域へ埋葬した。

翁の性格は手素無欲恬淡、物質に執着心がなく誰れ彼のの別なく訪ふ人

一歳の年に母は他界した。敬十年を  
経て淡田屋は没落し祭祀が絶えたの  
で改めく野崎家の堂域へ移葬したの  
である。

其他大小の墓標あるも文字埋滅し  
て判讀しがたい。

中段には左側(西)にニ墓あり。  
供養碑 能信院妙實日修信女

能 備前上道郡平井村吉岡惣太郎配  
野崎通種長女即右太姉也天正十  
二年十月十七日没葬于平井山之  
堂域

敬 長門國赤馬園蓋崎長平養子龜四  
郎野崎通種次男即右弟也明治  
二十九年一月十一日没葬于同市  
西細江町老明寺境内之墓地

二、 梅窓院妙音日常信女  
天正十三年五月建之野崎応六

女あれば喜んで一室に招き、酒肴を饗應して終日雑談に日を送り満足した  
という。

翁は家庭的には意まわす操りの大村氏より迎へた妻リ、この間に、二女  
をあげたが長女は五歳、次女は十六歳で他學し妻も翁に先づこゝと十四  
年前にこの世を去り、晩年は妻であつた又、子を台妻に容れ寂しい生涯を  
送つたのである。こうして家系がなかつたので親戚に當る中田の御船重を  
郎の身、虎之助の二女、千代子を養育して若結とし岡山市大安寺出身の森  
岡公女を養嗣を迎へて宇野家をつかした。当主達美である。

二、

金沢院 萱江 日長居士 昭和廿八年四月八日 壬午八十五歳 (長三郎)  
金運院 妙珠 日善大姉 昭和十四年一月二十三日 壬午六十歳 (長リク)

一、

山面 一如院 草野家累代 三諦院 山面 智賢孫子 紅蓮院

石面 円融院 秋田院 裏面 昭和十三年一月十八日 達之功德長三郎

秋香院 妙菊信士 明治三十八年四月十八日 北八十五歳 (井次郎)

昭和三十三年四月八日 蓋江翁の六回忌に當り翁並に妻里久の墓石が新  
しく建てられた。

○ 岩藤傳乃 (でんない)

傳乃は通稱にして名は義知、字は治三郎という。始め通稱を傳乃と書いた  
が、内の字を譯みし乃に改めた。本姓は林氏にして庭瀬の人である。故山  
つ、備前國老天城の池田出羽政昭の宗臣調馬能を勤める食禄百二十石岩  
藤家長の養嗣になつた。義長の六代の仁を美房という。もと三河國の出身

三四

にして小早川秀秋に仕へ關ヶ原の役に從つて戦功をあらわれ秀秋が岡山城  
主五十二萬石に封ぜられるに及んで五百石を賜つた。間もなく秀秋が岡城  
せうれて更に池田氏に仕へ代々その宗臣になつた家柄である。

義知は享保二年三十五歳で家督を継ぎ、百石を食み、文化十一年に二十  
石を加賜せられた。調馬に巧みし、厚藩主に召されてその技を觀賞せられ  
たという。門人にしつて馬術を受けしもの數百人、當時調馬をもつて光の眩  
にあらつたものが藩中に相傳つたが門人の盛んであつたことは義知の右に  
出るものはない。

妻は同藩士水野氏より迎へ三男一女を擧げた。嫡子義宣は十八歳にして  
宗家を継ぎ、次子は同藩士峯氏に、三子は石川の嗣とした。又一女は津川  
正定に嫁いだ。

義知は明和四年十二月廿九日庭瀬に生れ(庭瀬とは詩心居)、文政七年十二  
月廿七日岡山市野田屋町天城下屋敷の邸宅で年五十七で生涯をこめた。日  
蓮宗の僧者にしつて佛住山蓮昌寺に埋葬したが大正の末期寺の墓地整理のた  
め堂山の墓地に移葬したのである。

○ 本庄梅翁

通稱を新兵衛といひ、号を梅屋、又は古山、年酔亭などと稱した。梅翁は岡  
山藩の家老池田伊賀の四臣であつたが、故あつて縁を棄て流浪の身となり  
倉敷、妹尾あたりには遊寓し慶應年間には撫川の邊をあらわし、鎮守中川達軒  
に仕へて儒官となり家臣を教授する傍私塾を開いて子弟の養育に盡した。が  
辭して明治の初年に再び岡山の地に戻り同二十年の頃、七十歳で歿した。  
詩かな記録はわづらな。梅翁は夙に経史に通じ詩文に巧みし、撫川あた  
りにはその遺墨を藏するものがある。

梅翁は貴名菘翁を師とし、その書風を學び、又中國の陳大年を慕うてそ

の書道をも習得した。常に勤王の志士と交遊し喜んで時事を談じ好酒、たま〜皇室の衰微せることに誹及すれば夜の明けを知らなかつたという。

著書に『凡意紀』がある。これは天保元年より明治七年までの三十九年間著した維新の履歴を世情を鬼聞と在記録である。別に備中暗動記もある。

○ 岩月白華

通稱は沢右衛門、名は良直。白華は号である。父は庭瀬藩士岩月武右衛門清豪といひ、庭瀬藩邸内に生れた。幼少の頃より歌道に長じ香川景樹の門に入り回学を能く和歌に巧みであつた。和歌は桂園派に属し木下幸文、菅沼武雄、高橋正澄、小野、務、小川真澄等と共に桂園の名歌人に数へられ

てゐる。白華は禪道を修め常に性癖として御土の古事に詳しく領内の名所旧蹟を探究し、藩中第一の者といはれられた。晩年には吉備の中山にある有木の別所、萩原大納言尚親の邸所の遺蹟を保存せんとしここに住し、自ら有木居士と稱して筆硯に樂んだ。

海を去るは、の交れてここに有木山、ちのおもふことはなき身なりけりと詠じた。

白華は明和三年に生れ七十三歳の天保九年八月十三日にこの世を去つた。墳墓は清水山松林禪寺にある。墓碑に

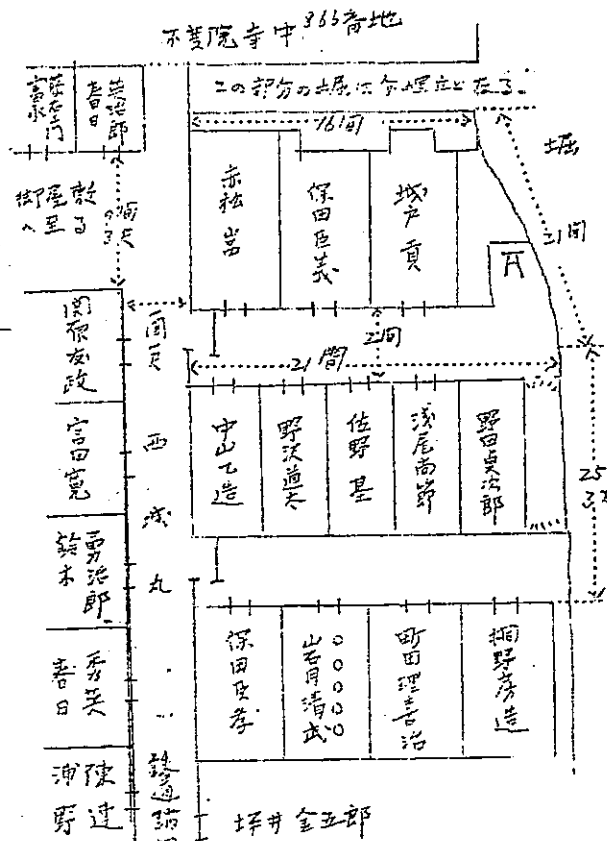
白華堂正定良直居士 岩月沢右衛門良直墓 天保九年八月十三日

眞如院法室恵性大姉 室の年号、俗名は初んではない。送終によるものであらう。其の他數十基がある。(後三福寺院蔵松林寺参照)

岩月氏の邸宅は覚如山不養院の南約一町、今は田圃となつてゐる。

子孫 六五

は岡山市に在任す。



和裁塾

仕立物調製  
初心者歓迎  
初心者歓迎  
字垣

△ 岩月氏旧邸宅之圖

このはその子孫にして屋敷は邸内の北西隅、大手門を入つた西詰、濠池に接した處に在つた。大河内氏は元禄十六年癸の正月十六日板倉家侍帳に「結人中、小姓百石大河内九右衛門」とあり、板倉家侍帳中、字重高が庭瀬に轉封の際

元禄十六年板倉家侍帳書付に百石、邸奉行、岩月武右衛門とあり、良直の先祖にして寛文七年より三十七年勤仕の譜代の家臣である。よつこ三河國の人である。

父清豪を通稱武右衛門といふは先祖の名を襲名したもので寛文七年から父の強した寛政四年まで百二十五年を経て、いふので六、七代後になつた話である。

○ 大河内篤齋

庭瀬藩士にして天保の頃の人。和歌に堪能であつた。

その作歌に思ひ収りやめのまくらにかほるなり

系統は詳くない。廢藩置縣の時の記録に大河内廉次郎とある。

仕へた家臣である。墓は松林寺境内にある。昭和十一年十月廿九日の墳墓  
が数十基あったが悉く整理し、今は「大河内家累代墓」と刻んだ一基がある  
子孫は大坂にありと。

○ 岡 勝造

勝造は天保三年四月三日妹尾町西磁の沖野平兵衛の五男として生れ、下撫  
川の難儀商岡 政吉の養子となつた。住居は岡部医院の東隣り二百九番地  
にあつたが今は取毀され、そのあとには岡部和男氏の所有地である。

勝造は幼少の頃、草商に勤め、その傍回著を習得して二の道に樂んだ。  
背は低かつたが上品で謹厳実著、談話など一言もなかつたといふ。津川近  
在では斯界にその名を知られ、多くの弟子を持つていた。明治五年六月二十一日、中  
島深藏、雄波吟藏等は勝造に呼奉りて、勝造に子供二男あり長男を幸三郎といふ。

勝造が五十歳の時、十九歳で死すに間に合ふと、安慮伊にも北別レ波男の傳造  
當時十歳と其に晩年は家といふ生涯を送つたやうである。

本了院の過去帳に  
妙枝院 樂道居士 明治廿五年六月十日 壽七十一才 岡 勝造

秋月 宗悟信士 明治廿五年六月十日 岡 勝造 傳  
とある。勝造の妻は天保九年十月二日の生れであるが、其頃の年月はわ  
からない。

岡 政吉一勝造 幸三郎(弟)  
雪林は子にして名は昌順といふ。また本名居士と号した。庭瀬藩後倉氏の

○ 岡 西雪林と岡 西鯉山  
御典医を勤め、藩医の首班にあつた。医術は藝を成し、その系統は齋藤

ある。順と、う紀伊の又々う出田藩細に達し、後寺に雪林が継承したもので  
技に達して、いた。匠師の醫術を授け、その筆翰に親み、六法にも諳し、く庭瀬に創  
雪泉といふ函家が來遊した時、此に呼奉りて、大に主達する處があつた。

當時雪泉の奥義を傳へたものは雪林の一字を襲つたもので、中備にあつては  
この雪林といはれ、雪林の号は雪泉の一字を襲つたもので、中備にあつては

雪林の書風は現在稀地にみよる處があるが、一づれも清賞な筆法を運ばし  
てゐる。天保十五年に没した。送葬をせしむる時、明治廿五年四月、岡山市東中山

下に内科を岡葉と名聲は高つた。号は鯉山といふ書をよくした。性奇骨に  
して、當時石本於義大、坂田九峰と傳へ、九峰の頃、時の岡山県知事松垣

直右の娘が急に胃腸を痛めたので、直右は又力事をやつて、岡西先生の來診  
を求めたことがあつた。早速先生は知事の官舎へ赴き、娘の容体を診察して

いたが、隣室との間の襖が少し開いて、たの視くとおぼなく、ちうと目には  
いに正腹し、知事とはいへ、娘の診察は還はしたくない。といつて、此のまゝ

まへぬむ程がある。直右はおどろいて、早速改め、私を辱うし、頼み込んだが、二  
帰つてしまつた。直右はあどろいて、早速改め、私を辱うし、頼み込んだが、二

度と應じなかつたといふ。當時の知事と云へば、今の時代と違つて、まだ封建  
時代の氣風が抜けきらず、大名格として威張つたものであつたが、これには

直右も大いに閉口したといふ。又或る人が病院へ先生に診て貰ひに行き、去  
開で「大將は居らぬか」と看護婦に尋ねた。(大將とは先生のこと、岡山地方では下

直右も大いに閉口したといふ。又或る人が病院へ先生に診て貰ひに行き、去  
開で「大將は居らぬか」と看護婦に尋ねた。(大將とは先生のこと、岡山地方では下

直右も大いに閉口したといふ。又或る人が病院へ先生に診て貰ひに行き、去  
開で「大將は居らぬか」と看護婦に尋ねた。(大將とは先生のこと、岡山地方では下

直右も大いに閉口したといふ。又或る人が病院へ先生に診て貰ひに行き、去  
開で「大將は居らぬか」と看護婦に尋ねた。(大將とは先生のこと、岡山地方では下

直右も大いに閉口したといふ。又或る人が病院へ先生に診て貰ひに行き、去  
開で「大將は居らぬか」と看護婦に尋ねた。(大將とは先生のこと、岡山地方では下

直右も大いに閉口したといふ。又或る人が病院へ先生に診て貰ひに行き、去  
開で「大將は居らぬか」と看護婦に尋ねた。(大將とは先生のこと、岡山地方では下

卑なるの公言を言ふべきである。これに聞かぬ、長女起代子を娶らうとわかれ、「岡山には第十師團長が中將だ。それが一番偉いのだ。岡山には大將は居らん」といつて帰らしたという。一幸が言事こうした奇行の持主であつたらう。と、先生に手を握つてもらふは、いつ死んでも満足ぢや」と、医術では評判のあつた人である。

龜太郎は始め同じ鹿瀬藩の士、改井通之の長女起代子を娶り一男二女をあげた。男を介爾といひ東京に出で医を同業し、長女壽子は浅口即里在村浜中の出身物理学の権威者として知られた医学博士仁科芳雄の弟、仁科保夫に嫁いでいる。保夫は東京帝國大學を卒業へ電気学を修め大東亞戦争に即里に随同中病を得て昭和十九年に三十六歳の男盛りで歿した。次女貞は倉敷市本町の豪商小原屋内田瑞八に嫁いだ。

不幸にして妻起代子は明治三十三年十月六日二十七歳で急逝したので後妻として矢掛町の素封家高草監次郎の妹を迎へ四男一女をもうけた。一子順次郎は医学博士に成り、今東京にある。龜太郎は晩年岡山をたたらんや順次郎を頼つて京都へ移り、昭和五年一月、六十八歳で此世を去つた。岡山西家の墳墓は吉備町八幡山にある。「岡西家先祖之墓」と簡單に刻んであるその傍に

真珠院昌哲居士 文政三丙寅二月八日 岡西昌哲之墓  
清真院妙哲大姉 文化四年十一月廿七日 (昌哲の妻である)

これは雲林の両親の墓である。雲林以右の墓は岡山市尾京町菅能寺にあり、

明治二年の板倉家侍帳に「御医師十五人扶持 岡西昌前」とあるは雲林の子にして代々名に昌の文字を用いてゐる。

岡西家の旧屋敷は鹿瀬藩御表門の濠池を隔てた堤端を東へいつた北側、今の増田向の處で壘山の父の昌仰の時代に一時中田地内へ移り、更に鯉山の時に岡山へ引越したるのである。

△ 岡西昌哲 — 昌順 雲林  
天保五年去 坂倉家醫師 宣和御共御終此年 六十八歳  
御医師 十五人扶持 佐藤忠三郎の二女 右字  
明治六年一月廿日死 元保十年三月十八日  
昌仰 雲林  
明治五年一月十六日去 六十八歳  
宣和御共御終此年 及有遺 宣和二年十月廿日去 六十七歳  
右字 宣和二年九月廿日去 六十三歳

△ 九月物語 故者  
戸川吉善達富(徳川二代領主)宣保五年九月廿九日五十八歳  
渡辺竹操(鹿瀬藩旧老)安政四年九月十五日五十五歳  
戸川肥右守秀安(鹿瀬初代藩主達安の父、常山城主)慶長二年九月六日六十三歳

貸衣裳

松本質店

吉備町 栄町  
吉備局 電話一五五番

修理 接 溶

山崎鉄工所

吉備町 栄町  
吉備局 電話156番

- 清 明徳五年生 鹿瀬即 公土村 出見田 吉行 藤八に嫁ぐ
- 順次郎 明治廿八年生 東京 仁科醫師
- 綱三郎 光
- 徳四郎 在京都
- 啓三郎 死 (おわり)
- 介爾 明治廿五年五月五日 十三日生 東京 仁科醫師
- 貞 明治廿七年五月十五日 生倉敷市本町 瑞八に嫁ぐ
- 壽夫に嫁ぐ